

美術館ニュース

no. 180
2020 4/1

catch the eyes

－目から心へ－

2020年4月18日[土]
－6月7日[日]

会場：展示室1

休館日：月曜日（ただし5月4日は開館）、5月7日（木）

開館時間：午前9時30分～午後5時
（入館は午後4時30分まで）

観覧料：一般 620 (490) 円、大高生 310 (240) 円
* () 内は 20 名以上の団体割引料金
* 中学生以下、障害者手帳等をお持ちの方とその
介護者 1 名は無料

美術作品と出合った瞬間、私たちはまずそれを目でとらえ、その次に、何が描かれているのか、どのように作られているか、作者は何を表しているのか、などの考えに移っていきます。でも、ただその前を通り過ぎてしまったら？きっと作品がもっている情報やメッセージに気づくことも、理解することもないでしょう。作品が人の視線をとらえる理由は様々です。色がきれい、とても大きいといった造形上の要因もあれば、特定の感覚や感情を呼び起こす心理的な側面もあるでしょう。どんな理由であれ、人の目をひきつけ、はっとさせることは、作品にとって大きな力であることは間違いありません。

この展覧会では、そんな「人の目をひく」作品をいくつかの切り口から紹介します。さあ、あなたの目をとらえるのはどの作品でしょうか？それはなぜなのでしょう？自分の心の動きとともに作品を見つめる機会としていただけたら幸いです。

◆関連事業：学芸員による作品解説会

5月23日(土)、6月3日(水)午後2時～3時 *申込不要・要観覧料



アンリ・マティス 『ジャズ』より 《運命》 1947年



エドヴァルト・ムンク
《マドンナ》1895/1902年



野又 穂
《Structures-1》1993年
寄託作品



鶴岡政男《ロレンスの顔》1951年

《ゲルニカ（タピスリ）》—《ゲルニカ》を知る・タピスリを考える— 松下由里

1937 年、ゲルニカの無差別爆撃の悲劇を描き出した《ゲルニカ》は、ピカソが世界に向けて戦争の悲惨を訴えた作品として名高い。現在はマドリッドに収蔵されている。これを原画とする当館所蔵の《ゲルニカ（タピスリ）》を中心に据えた展覧会「ピカソ展—ゲルニカ [タピスリ] をめぐって」（註 1）が昨年秋に館林美術館で開催され大きな反響を呼んだ。当館では、この春約二年ぶりに展示する予定である。ここで、本展を企画した松下和美学芸員の研究成果（註 2）に基づいてこのタピスリ誕生の経緯を概説し、更に当館に収蔵されてからのトピックスをご紹介します。

《ゲルニカ》のタピスリ・バージョンは 3 点作られ、当館の所蔵品は最後に織られた第 3 バージョンである。ヨーロッパでは中世以来、王侯貴族のために物語や風景を描き出した壁一面を覆う豪華なタピスリが織られている。王立のタピスリ製作所を作り、宮廷画家がタピスリの原画を描き、これを元に最高の技術で織り出した。20 世紀になるとモダンアートを原画とした新たなタピスリ製作の機運が高まり、ピカソも 1930 年代からタピスリに原画を提供していたが、ピカソのタピスリ制作が本格化するのは戦後のことである。

ピカソは 1950 年代に南仏を拠点とし、ここでタピスリ制作者ジャクリーヌ・ド・ラ・ボーム＝デュルバック（1920-1989）と出会う。ピカソに選ばれた彼女は最終的に 27 点のピカソ原画作品を織る。1955 年に《ゲルニカ》のタピスリを最初に注文したネルソン・A. ロックフェラーは、ピカソ原画のタピスリの熱心な発注者であり、19 点のピカソのタピスリを収集している。

当時《ゲルニカ》を収蔵していたニューヨーク近代美術館のコレクション部長アルフレッド・バー・ジュニアは、ロックフェラーのコレクションに対して助言していたが、黒から白へのモノトーンで彩色されている原画に対して、タピスリは褐色、ベージュ、黒の色調であることを問題視し、以後の注文で色調を原画に忠実に合わせることを要求した。しかし絵の具で作り出す微妙なグラデーションや筆触をタピスリに織り出すには、織り方を工夫し、また幾つかの色面に置き換えていく必要がある。ピカソ自身は、デュルバックが原画をタピスリ化する際のアレンジメント方法を高く評価していた。例えば絵画的な明暗表現を、タピスリとして効果的な色の対比に変換することなどがそれにあたるであろう。その後、《ゲルニカ（タピスリ）》は 1976 年に第 2 バージョン（ウンターリンデン美術館所蔵）、そして 1983 年に第 3 バージョンが制作され、色調はいずれも微妙に異なっている。《ゲルニカ（タピスリ）》は《ゲルニカ》の複製ではなく、絵の具が作り出すグラデーションを斑点状のパターンに置き換えたり、筆触を小さな色面に表すなどアレンジを経て、《ゲルニカ》のインパクト、イメージを巧みに伝えるものとなっているのだ。

当館は 1996 年度に《ゲルニカ（タピスリ）》を基金購入している。「戦争と美術」というテーマにもとづくコレクションの一環である。この第 3 バージョンは、展覧会への出品を目的として制作されたようである。興味深いことに、1962 年に国立西洋美術館で開催された《ピカソ展》には、ゲルニカ・タピスリの第 1 バージョンが出品されている。実は、当時ニューヨークにあった《ゲルニカ》出品を希望し、ピカソ自身は日本の被爆という悲劇をふまえたと思われ、出品に前向きであったが、保存状態の問題から代わりにタピスリが貸し出されたという。第 3 バージョンが日本に収蔵されたことは興味深い帰結である。

《ゲルニカ（タピスリ）》購入は群馬県のこの年の重要なトピックであり、すぐに「スポレクぐんま'96」での展示が要請された。タピスリは素材がウールと木綿であるため経年で劣化し、照射された光に応じて退色していくデリケートな性質のものであるため、現状をできるだけ長く保つために、一年間に数週間程度のみしか展示できない。新たな購入作品を多くの県民にお披露目する好機ではあったが、展示場所は体育館であり、温湿度の環境維持など環境面でクリアすべき課題の多い展示でもあった。

《ゲルニカ（タピスリ）》は貸出しの依頼の多い作品である。全国の愛好者に見ていただく良い機会であるが、そのぶん当館での展示を控えることになる。最初の県外への貸出しは 1998 年広島市現代美術館の「ヒロシマの心とジャン・リュルサの《世界の歌》」展である（註 3）。これは当館との共同企画展で、20 世紀のタピスリ復興者リュルサの代表的な連作《世界の歌》に広島の実爆投下のイメージが織り出されていることから広島での展示が企画され、あわせて《ゲルニカ（タピスリ）》の出品が望まれたものである。（原爆の被災地である広島と《ゲルニカ》の担う平和のメッセージとの縁は深く、2013 年にも広島県の「ピース・ミーツ・アート」展に出品している。）2016 年には沖縄への貸出しも行っている（註 4）。これは「ゲルニカ（タピスリ）沖縄特別展」という、戦後 70 年を記念する特別な展覧会を企画した主催者の強い願いを受けたものである。

これまでの展示においては、《ゲルニカ》のメッセージをタピスリによって伝えるという役割が大きかったといえるだろう。さらに、デュルバックという織り手とピカソとの協働の経緯の研究も進み、館林美術館での「ピカソ展—ゲルニカ [タピスリ] をめぐって」を経て、タピスリ成立の経緯が徐々に解明されつつある。《ゲルニカ（タピスリ）》は、《ゲルニカ》のメッセージを伝える側面のみならずタピスリとしての特性も併せ持つ、ユニークな存在なのである。



1



2



3



4

- 1「ピース・ミーツ・アート」展 展示作業（2013年7月、広島県立美術館）
- 2「ピース・ミーツ・アート」展 展示風景
- 3「パブロ・ピカソ ゲルニカ（タピスリ）沖縄特別展—戦後70年、今ゲルニカで考える—」看板（2016年3月、沖縄県立博物館・美術館）
- 4「パブロ・ピカソ ゲルニカ（タピスリ）沖縄特別展—戦後70年、今ゲルニカで考える—」展示室

註 1

「ピカソ展—ゲルニカ [タピスリ] をめぐって」群馬県立館林美術館、2019 年 10 月 5 日—12 月 8 日

註 2

松下和美 『《ゲルニカ（タピスリ）をめぐって》『ピカソ展—ゲルニカ [タピスリ] をめぐって』図録、pp.56-63

註 3

「ヒロシマの心とジャン・リュルサの《世界の歌》」広島市現代美術館、1998 年 12 月 17 日—1999 年 3 月 21 日

註 4

「パブロ・ピカソ ゲルニカ（タピスリ）沖縄特別展—戦後 70 年、今ゲルニカで考える—」沖縄県立博物館・美術館、2016 年 3 月 19 日—4 月 17 日

コレクション展示 [展示室 2]

■日本と西洋の近代美術Ⅰ 4/11～6/7

当館の収蔵作品の中から、印象派から 20 世紀前半の西洋近代絵画、群馬ゆかりの作家や明治から昭和を代表する作家たちによる日本近代洋画ならびに彫刻を展示します。パブロ・ピカソ《ゲルニカ(タピスリ)》を特別に展示いたしますので、この機会にぜひご覧ください。



パブロ・ピカソ
《ゲルニカ(タピスリ)》展示風景
(2018年)

[展示室 7] 山種記念館

■四季のうつろい —戸方庵井上コレクション— 4/11～5/10

当館の設立に尽力した高崎市の実業家井上房一郎氏寄贈の「戸方庵井上コレクション」より、四季をテーマに日本と中国の絵画をご紹介します。



伝俵屋宗達(画)、本阿弥光悦(書)
《卯の花図屏風》
江戸時代

■水のある情景 5/12～6/7

水は、雨、雪、川、海などへ姿をかれ、生命を支え育んでいます。古くは文明の源泉であった「水」。今回は、収蔵作品の中から「水」をテーマに、近世から近代にかけてのさまざまなジャンルの絵画をご紹介します。



長谷川宗宅
《柳橋水車図屏風》
桃山時代

令和 2 年度教育普及事業のお知らせ

年間を通じて子どもからおとなまでを対象にしたさまざまなプログラムを開催しています。「見る」「学ぶ」「造る」「考える」— 興味に応じた体験を選び、美術館での時間をお楽しみください。また、学校の鑑賞授業や校外学習、研修にぜひご活用ください。

■レクチャー／ギャラリートーク

- ①ミュージアム・レクチャー
企画展開連の講演会を行います。
- ②サンデー・ギャラリートーク
学芸員がコレクション展示作品について解説します。

■イベント／ワークショップ

- ①こども＋おとな＋夏的美術館
夏休みの期間中、体験活動やワークショップを行います。
- ②美術館アートまつり
簡単な工作やゲームなどのさまざまなプログラムを楽しめる 1 日です。

■こども・ファミリー向け事業

- ①こどもアートツアー
小中学生を対象に、ゲームや対話による作品鑑賞を行います。親子、家族で参加できます。
- ②ファミリータイム
小さなお子様連れが気兼ねなく鑑賞できる親子優先時間帯です。

■学校との連携プログラム

児童生徒を対象に、鑑賞活動をサポートするスクールプログラムを用意しています。出張授業、教員対象の研修なども行います。

*他に、ボランティアによる作品解説、お茶席などを開催しています。

*各事業の開催日、時間、参加方法、参加費等については、当館 HP もしくは、直接お電話でお問い合わせください。



P i c k u p

友の会では令和 2 年度の会員を募集しています。友の会は、会費や館内ショップの利益を活用し、近代美術館を支援している団体です。会員には県内 5 つの美術館の観覧料が減免になるなど、様々な特典があります。是非この機会にご入会ください。

■会員の種類と年会費【有効期間は 4/1～翌年 3/31】

- 一般会員 2,000 円 / 学生会員 1,000 円
 家族会員 [同居 2 人分] 3,000 円
 [3 人以上は 1 人につき 1,000 円追加]
 個人賛助会員 [一口] 10,000 円
 法人賛助会員 [一口] 20,000 円

■観覧料が減免となる美術館

群馬県立近代美術館・群馬県立館林美術館
 [両館あわせて年間 2 回無料、ほか半額]
 高崎市美術館・高崎市タワー美術館・高崎市山田かまち美術館 [団体割引相当額]

■主な事業

- * 展覧会・教育普及事業・広報への支援・協力のほか、コンサートや講演会等を開催。
- * 会報の発行、ミュージアム・ツアーなど、会員のための事業を実施。

友の会だより



令和元年度 冬のミュージアム・コンサート
(演奏: 荒井美幸)



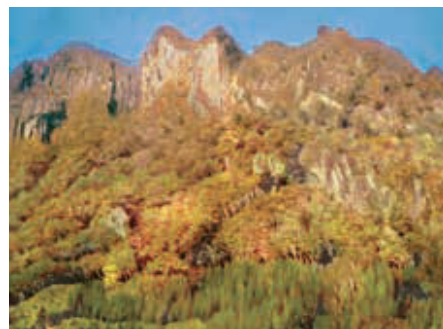
令和元年度 秋のミュージアム・ツアー
(岡田美術館)

【お問い合わせ先】 群馬県立近代美術館 友の会 Tel.027-346-5560 (館代表) / Fax.027-346-4064

妙 義山は、群馬県の西部に位置し、赤城山、榛名山とともに上毛三山のひとつに数えられている。急峻な崖や絶壁がいたるところに形成され、奇岩怪岩に富んだその奇勝は、耶馬溪、寒霞溪と並び称され、古くから多くの画家のインスピレーションの源となっている。たとえば、日本最後の文人といわれている富岡鉄斎の屏風絵《妙義山図・瀨八丁図》(布施美術館蔵)、日本絵画の近代化をすすめた狩野芳崖《悲母観音》(東京藝術大学蔵)に描かれた山容は妙義山に想を得たものとされている。

さて、ここに紹介する作品は、いくつもの頂を擁する妙義山のうち白雲山を描いたものである。麓に杉林を配し、中腹に樹林、頂上付近は切り立つ断崖の山肌が見える。褐色に淡いみどり色が溶け込んだような、早春の景色が柔らかな筆致で表され、すこし湿り気を帯びはじめた大気が広がる。作者は、「東京に比較的近くて、山岳の峨々たる風景が見られる妙義はすばらしい」と述べ、たびたび同地を訪れている。本作以外にも妙義を画題とした日展出品作に《妙義晩秋》(昭和31年)、《晴曠》(昭和33年)、《嶽》(昭和34年)、《爍》(昭和36年)、《妙義赤嶂》(平成元年)などがありその愛着ぶりがうかがえるだろう。

作者の奥田元宋(1912-2003)は、広島県双三郡八幡村(現・三次市)に生まれ、昭和5(1930)年に上京し川合玉堂門下の児玉希望に師事した。初期は、主に人物画や花鳥画などを中心に描いていたが、昭和19(1944)年、郷里への疎開を機に風景画に取り組むようになり、戦後は、日展を舞台に風景画家として活躍。明快で画趣あふれる写実表現、胸中の景色を昇華した心象風景など、多彩な風景表現に取り組んだ。昭和48(1973)年、日本芸術院会員。昭和56(1981)年、国の文化功労者として顕彰され、昭和59(1984)年には文化勲章を受章した。



奥田元宋《妙義》昭和48(1973)年
紙本着色・額装 169.0×231.0cm

次回展覧会案内

絵画のミカタ

2020年6月27日[土] - 8月23日[日]

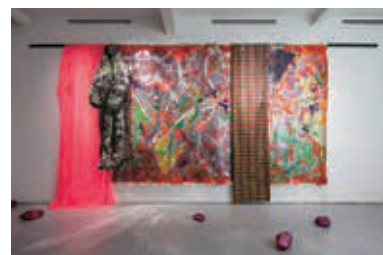
会場: 展示室1

休館日: 月曜日(ただし8月10日は開館)

観覧料: 一般 620(490)円、大高生 310(240)円

* () 内は20名以上の団体割引料金

* 中学生以下、障害者手帳等をお持ちの方とその介護者1名は無料



鬼頭健吾《cartwheel galaxy》2019年
[撮影: 木暮伸也 写真提供: rin art association]

私 たちの周りには絵があふれています。美術館に行けば、様々な時代に、様々な地域で描かれたたくさんの絵と出会うこともできます。絵の中に知っているものが描かれていれば、なんとなくわかったような気になりますが、なぜそれが描かれたのか、どうしてそういう描き方なのか、考えてみるとなかなか難しそうです。さらにそれが抽象絵画だったりすると、「わからない」とつぶやいて通り過ぎてしまいませんか？

では、実際に絵を描いている人は、絵をどのように見ているのでしょうか？ この展覧会では、長い歴史を持つ絵画の新しい可能性を切り開いている5人の作家といっしょに、絵の見方を探ってみたいと思います。

5人には、当館のコレクションの中から好きな絵をいくつか選んでもらい、自身の作品とともに展示してもらいます。彼らがその絵を選んだ理由からは、アーティストならではの着眼点や感性が浮かび上がってくるでしょう。彼らが絵のどこを見て、何を感じ、考えているかを知ること、私たちもこれまでとは違った絵の見方、感じ方ができるようになるかもしれません。常に新しい表現に挑戦している彼らの作品に対しても、理解が深まることでしょう。

まずは自分自身の目で絵を見ることも大切ですが、日々絵画と向き合っているアーティストの見方、感じ方を知ること、さらに多様性に満ちた奥深い絵画の魅力がひらけてくるでしょう。絵の「見方」を知って、あなたも絵の「味方」になってください。

出品作家: 牛嶋直子、門田光雅、鬼頭健吾、佐藤万絵子、原游

